

長所を見る

2022. 12. 22

もし、人を使うことにコツがあるとしたら、それは何だろうか。たぶん、誠心誠意ということを考えて、その人と接していくことではなかろうか。一番はその人の長所をたくさん見ることである。

秀吉と光秀が信長をどう見ていたかという話がある。秀吉は信長の長所を見ていた。終始長所が目についた。光秀も非常に誠実な人だったらしいが、常にその欠点を見ていた。信長の長所を見て、それに共鳴したのが秀吉である。欠点を見て、それを是正してあげようとしたのが光秀である。信長にしてみると、どっちがうれしいか。

松下幸之助は、人を育てる名人だとうたわれた。名人たるゆえんはいくつもあるが、その一つが部下の長所を見つけることにかけては抜きん出たものがあったことである。その人の長所は、誰が見ても長所と思うものではない。松下幸之助は、見方を変えれば長所と考える人だった。周りの人が、あれがあの人短所であり、欠点だということも、松下幸之助は、「否、見方を変えたら長所やな」と言う。「縁があって入った会社で、すべての社員が百パーセント以上に力を発揮してもらわんことには、算盤に合わん」と考えていた。

松下幸之助は、経営者である。「見方を変えれば長所」と考えられるのが経営者である。校長も、学校を経営している。基本的には同じであろう。「見方を変えれば長所」は教員にも生徒にもあてはまる。ある人を、ある方向から見ればこう見えるが、違った方向から見れば、また違って見える。物事も同じである。人も物事も、一つの方から見て判断して決めつけてしまうのは危険である。

若い先生方には、目の前に自分にとってモデルとなるような先輩教員がいることが理想だが、現実的には、なかなか難しい。そこで、A先生のいいところ、B先生のいいところ、C先生のいいところ、それぞれから学んで、自分をつくっていくとよいと話している。そうすれば、先輩の先生方のことをよく見るようになる。何かを吸収しようという姿勢で接するようになる。

昔よりは、人も物事も、様々な角度から見るができるようになってきた気がする。いや、そうしようとしている。生徒指導など、一人の情報や一つの出来事で判断することはしない。「本当にそうか」という考えを常にもちながら対応にあたるようにしている。

「見方を変えれば長所」には、その根底に寛容の心があるように思う。私の「学校経営三か条」の三つめに「教職員を幸せにする」というものがある。先生方が、健康で持ち味を生かしながら力を発揮してくれれば、教育的効果が期待でき、生徒は幸せであろう。先生方が力を発揮できるような環境づくりが私の仕事である。

このような考えの土台には、寛容の心がある。人を許せるようになると、人の短所も長所に見える。見方を変えたら、短所も長所になる。立場が人をつくるというが、立場は、それまでの見方をも変えてくれる。「いや、それはかえって長所だな」言ってみたいものである。